



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第四十五号

2024/6/30 発行

題字：高橋弘美

ようやく梅雨に入ったが、全国の天気予報を見ているとずいぶん暑そうである。いまから三十度超えを連発している地域も大変だろうが、どうせあとひと月もすると、ここいらもそういう世界になるのだろう。

先日、ついにわが部屋にもエアコンがついた。これまで居間にしかついていなかったのだが、ものごとというのは動くとなったら急に動くものようで、あちこちの部屋にまとめて三台も設置することになった。父のいところが知り合いの業者を頼んでくれたのだが、その人がそもそも六十を過ぎていて、さらに七十をとうに過ぎたシルバー人材男性を連れてきた。ふたりして無事一日で仕事をし終えたが、シルバー人材職人にとって、一日三台の設置はさすがに酷だったと見え、仕事が終わったころには見るも無惨にくたびれ果てていた。

だが業者の話では、エアコンの設置など夏場の一時にしか仕事がないので、働き盛りの人間がこれ一本でやっていくのは難しいのだという。どんな分野でも、技術職はおおかた高齢化が進んでいるに違いないが、エアコンの設置もどうやら例に漏れないようである。

今号の内容

無用の用
人の天分

無用の用

小学校の六年間ピアノを習っていた関係で、部屋にアップライトピアノがあるのだが、せんだつてふと、こいつももう役目を終えたというような気がした。東京の家を引きはらって実家へ戻ったとき、ピアノなどもう弾くこともあるまいと思って処分を検討したことがあるが、そう思っていた矢先にピアノが夢に出てきて、なんだか不満を訴えられているような気がして、結局そのままにしていたのである。それがなぜ急に処分する気になったのか、よくわからないのだが、母と部屋の模様替えについていろいろ話していて、このピアノがなければ部屋がずいぶん広くなるのではないかとか、いろいろ置けるものが増えるのではないかなどという話になり、なんとなくその気になってしまったのである。ピアノはヤマハ製で、三十年以上前に母が中古で買ってくれたのであるが、調べてみると、ヤマハは自社製のピアノでありさえすれば、どんなに古くても引き取っ

てくれるらしい。

これはしめだと思って、その旨を父に話したところろが、思いがけなく強い反対に遭った。なぜ売る必要があるのだと父は機嫌を損ね、話は終わってしまったのだが、あとになってから、父がピアノは空いている部屋へ移動させるから売るなどという。移動させると言ったって、あんな何百キロもあるものをどうやって動かすのだと訊くと、そんなことはわけないようなことを言う。わたしは半信半疑だったのだが、それ以上なにか言うとう父がまた機嫌を悪くしそうだったので、その場では黙っていた。

それから何日かして、父に小さな封筒で荷物が届いた。父はそれを持って、小屋へ行ってなにかしていたが、いきなりわたしの部屋に入ってくると、梘子と板きれとミニ四駆みたいな小さな台車を四つピアノの周りに広げて、おもむろに作業を始めた。

父はなにかするとしたら、自分の思いつきと都合だけでいきなりやりはじめるところがあり、相手の都合などおかまいなしなのである。ピアノの上にはいろいろ飾り物なども置いてあるし、移動させるとなったらみんなどこかさなければならぬが、そういうことは考慮のほかであって、そんな面倒なことは考えなくてもなんとかなるといふふうに、ごく気楽に考えている。わたしはあわててピアノの上の小物をどかし、父がピアノの脇に板きれを差し込んで、梘子でもって浮かしはじめるのにどうにか間

に合った。ピアノは思いのほか軽い力で傾きはじめたが、浮かしてみればじめてわかったのが、ピアノの脚の先にはなんと車輪がついていて、その車輪の下にくぼみのある受け皿を敷いて動かないようにしてあるということだった。

父の計画は、ピアノを片側ずつ梘子で持ち上げ、各々の脚の下に小さな台車を置いて、転がして動かしてしまえということだったようだが、こうなると車輪の下に台車を敷いたとしても、動かしている途中で車輪のほうに転がって、台車から落っこちてしまう可能性が高い。そんなら車輪受けの皿ごと台車へ乗せればいいかというと、手持ちの梘子と板きれとでは、皿を引き抜いて台車を置くくらいの高さを出すのがせいぜいで、とても皿ごと乗せられるほどの高さは出せない。第一そんなにピアノを傾けてはなんだかひっくり返りそうで、それはそれで恐いのである。

試行錯誤の末、結局、台車と車輪のあいだに段ボールの切れ端を挟んでみることになったが、こういふときに限っていつもそのへんにあるはずの使用済み段ボールというものがなく、探すのにひと苦労し、ようやく見つけてきて挟んでみたところが、結局車輪は滑ってしまっあま変わらないということが判明した。われわれはやや落胆し、しかし気を取りなおしてもかくもやってみようと、車輪が台車より先に転がっていかないように細心の注意を払いな

から、壁際に設置されていたピアノを少しずつ前へ押し出していった。

ところが、どうにかピアノを動かしてドアの前まで持ってきたところで、再び難題に直面した。わたしの部屋の前は廊下になっていて、向かいの壁なのだが、その廊下の幅三尺あまりに対して、ピアノの横幅は五尺もある。これはいったいどうやって部屋の外へ出すのか。

ここで激しい論争が起こり、少しずつ角度を微調整しながら斜めに搬出すれば外へ出るのではないかと主張するわたしに対して、父はさすがにこの幅では外へは出せない、そんなことは見ればわかると言い、最前から様子を見守っていた母も議論に加わって、そもそもこのピアノはどうやってこの部屋に運んできたのだったかを問題にしはじめる。

それをきっかけに議論はやや脇道にそれ、だいたいのこのピアノはいつ買ったのか、三十年前に旧家からこっちの家へ越してきたときもうあったのか、それともそのあとに買ったのか、なる議題に対して全員別々のことを主張し出し、父は引越前にはこのピアノはなかった、最初からこの家に運んだのだと言い、母はそうでない、昔の家に住んでいた時分からあったのだと言い、肝心の持ち主たるわたしはというと、旧家の自室にこのピアノがあったかどうか思い出せない始末で、しびれを切らした母が当時の家計簿を確認しに行き、このピアノは向こうの家

からこっちへ運んだのです、運び賃は二万円でしたと勝ち誇ったような、怒ったような顔で言う。すると今度は父があやふやな記憶をたどって、確か顔見知りのどこそこに住む人が楽器店に頼まれて、ベルトでこいつを持ち上げて縦にして玄関から運び入れたのでなかったかと言出し、ということはこのまま横向きにドアから出すのは不可能ではないか、天井におつかからない程度に斜めに持ち上げて運ぶしかないではないか、そんならせつかく買ったこの台車は意味がないではないか、などと、このあたりまで来ると、みんなもういささかうんざりして気が立っているから、無意味に互いを責めあうのである。

そのとき父がひときわ声を荒げて、だからおれは言ったではないか、一体全体、ピアノを売るとはなにごとであるか、おまえたちはピアノのある家とない家とで、その家に漂う文化的雰囲気や気配といったものがまるで違ってくるということがわからないか、ああこの家にはピアノがある、たとえそれが弾かれることもなく万年埃をかぶって、ひよつとするとただの物置代わりに使われているとしても、家中にピアノのあるのとないのとでは万事大違いなのである、こんなことがわからないとはまったく情けない連中である、いったいこのピアノをどかして、その代わりになにを置くというのか、どうせくだらない安物の三段ボックスだの収納家具だのといったものを置いて、ごちゃごちゃさせておくのが関の山

ではないか、まったくなんというわびしい光景でありさもしい精神であるか、ピアノを取っばらうしたもの置かれた部屋というものは、おまえたちはそういうことを考えないのかと、ちよつと驚くような剣幕で言ったのである。

われわれはしんとしてしまった。そこへ父がさらに続けて言うよう、ともかくこのピアノはわれわれ素人では動かせぬ、動かせぬものはどうにもしようがない、金を払って業者に頼むか、もとへ戻すかであるが、このあたりの床は三十年分の埃がたまって汚れているし、ピアノの裏も汚れている、これらを丁寧に掃除し、ピアノはまたもとへ戻すべし。おれはこの台車二千円分損をした。おれの貴重な労働力をも損なつた。なんとということだ、まったく。

こうしてピアノ売却騒動は終わったのであるが、その晩、長年放置され無残に汚れきつたピアノの裏側や蓋や鍵盤を拭いていたとき、わたしはピアノめがこちらをすねきつた目つきでじつと見ているのに気がついたのである。ピアノはむくれきつた子どもみたいに三角にとんがった目をして、このうえ何人たりとも自分を動かすことは許さぬぞとばかりに、もう力のかぎり身構えているのである。そしてそのとんがった目で、人のことを恨みがましく睨んでいるのである。

一応これで、おまえのことを考えたのだとわたし

は言った。この部屋に黙って置かれていても、どうせ弾かれもしないし、調律してもらえないし手入れしてもらえず、ただでっぺんに小物のたぐいをごちゃごちゃ置かれて、悪くすると鍵盤の蓋の上に洗濯を終えた衣類が山のように置かれたりする。今後もずっとそういう運命なのでは、おまえはせっかくピアノに生まれたんだのに、まったくあわれではないか。

余計なお世話だとピアノは言った。自分があわれかどうかなど貴様に決めてもらう筋合いはない、自分は動きたいとなったら自分でそのように取りはからうので、それをこちらの言い分も聞かず勝手に邪魔だの売るの移動させるのといって、いったい貴様は何様であるか。

それは悪かったとわたしは言った。だが言わせてもらえば、わたしだっておまえを手放すのはなんだか気がとがめるので、いよいよ手放そうという気になるまで二年もかかったのである。だいたいこの二年のあいだのみならず、おまえはもう三十年近くもろくすっぽ弾かれもせず、この部屋にただ放置されたり、まったく顧みられもしなかったではないか。そんなことでは、いやしくもピアノに生まれた身としてあんまりではないか。ピアノに生まれたからには、きつと音楽好きな一家の手にも渡って、日々愉快にポロポロ鳴らされていたいはずである。これでわたしがおまえを手放せば、きつと工場へでも運

ばれて、新品同様ぴかぴかになって生まれ変わり、ひよつとするとどこか外国へでも売られて、小さな子どもの指でポロポロ鳴らしてもらうようなことになるかもしれない、そうなればおまえだって、いまよりよほど愉快で幸福ではないかと思つたのだ。

それこそ大きなお世話だと、ピアノはカンカンになって言った。自分がどんな人生を送りたく思い、どんなことを幸福に思うかなど、貴様に推しはかっでもらうには及ばない。子どもの指になど興味はないし、外国へ行くなどまっぴらである。自分はここでこうして使われもせず、何十年も蓋も開けられずに、ずっと放っておかれている状態に満足しているのに、ただここにこうしていたいがために生まれてきた自分であるのに、それをピアノだから澄んだ音色も高らかに歌いたいはずだなどと思つたら大間違いである。自分は澄んだ音色にも歌にも音楽好きの家にもなんの興味もないのだ。

そりやまたずいぶんひねくれたピアノではないかと、わたしは呆れて思わず言つたものである。いつたいおまえはそんなことでもいいのか。怒りのあまり自暴自棄なことを言つていやしくないか。このままいけば、おまえはまた何十年も使われなまま、ただここに置かれているだけだ。わたしには音楽に対する熱意もないし、練習など大嫌いだし、おまえに対してよい持ち主であるとはとても思えないのだが。そんなことは知つたことかと、ピアノは叩きつけ

るように言った。貴様に音楽の才など少しもないことも、練習などという高等な行為ができつこない人種であることも、こちら承知の上である。貴様は読まなかつたのか、莊子の中に、なんの役にも立たないからこそ生きながらえて長寿を謳歌している木の話があるのを。役に立たないとか天分を生かさなにか、まったく大きなお世話である。自分はただここにじつとしてるのが好きなのだ、そしてどこへも出て行きたくなどないし、ポロポロ素敵に鳴らしてほしいなども少しも思わない。自分はただここでじつとして、おのれの時を謳歌しているのである。無用の長寿を謳歌しているのであるから、頼むから邪魔をしてくれるな。

などと、ピアノのくせにいつの間にか書物など読んでいるのか、人の部屋に三十年も居座っているものだから、どうも住んでいる人より物知りのようなのである。わたしはすっかり面食らってしまった、しばらく考えこんでしまったが、そのうちに、ピアノの言うことももつともだと思つた。これまで何十年も部屋に置いてきたのであるから、この先もずっとこのままでなんの問題もないだろうし、いまさらこつちの都合で放り出すというのも、やはりずいぶんと薄情である。わたしはわたしの都合で生きていくわけだが、ピアノもまたピアノの都合で生きていくのであって、そのピアノの都合とわたしの都合とどっちが重たいかと言つたら、どうもこの場合、ピ

アノの都合のほうが重そうである。わたしのはなんとなしの、根拠に欠けた一時の思いつきに過ぎないが、ピアノのほうは生存の様式の問題らしいからである。

そういうわけで、わたしはピアノ氏の訴えを容れ、すまなかつたすまなかつた、貴殿がそういう気持ちで過ごしていたとは少しも知らなかつたと謝って、そのまま部屋へ置いておくことにした。いつかこのピアノが鳴らされる日が来るのか、あるいはピアノ氏がみずからの時をさとして、この部屋を出てゆく日が来るのか、わたしにはわからないし、ピアノ氏本人にもわかるまいと思う。ものごとは多くそうしたものであるし、それでよいのだとも思う。ともかくも、今回このような騒動を起こしてピアノ氏の考えがわかつたことは、大変よいことであつたと思うのである。

人の天分

三年以上続いてきたこのひとり雑誌『雪下』であるが、ひとり雑誌というアイデアをわたしに授けてくれた人が、先日亡くなった。わたしは自分より年上の人とのつきあいのほうが多いような人間なので、その人も例に漏れず七十代で、広くあちこちの文学を涉猟して歩いた過去を持ち、定期的に自分のひと

り雑誌を発行して、みずからの思想を書きつづけていた。

この人が、ある日自転車に乗っていて転んでしまい、病院へ行つたところが、なんとガンが見つかつたのだという。それが昨年末のことだが、どうもそのガンは自覚症状に乏しいものだったらしく、見つかつたときにはすでに手術しなければという状態だったらしい。手術そのものは成功したらしいのだが、進行の早いガンだったようで、その後あつという間に亡くなつてしまつたのである。

こうしたことを、わたしはだいぶたつてから知つた。その人とはときおり手紙のやり取りをしており、その人の発行するひとり雑誌を送つてもらつたりもしていたし、わたしの本を送つたこともあつた。どうも最近便りががないな、などと思つていたら、そういうことだったらしいのである。

通常、このようなことがあると、遺族に手紙を書くとか、せめて香典を送るとかにかしそうなものである。ところがわたしはそうしたことをみんなすっぽかす、すっぽかしたまま何ヶ月も経つてしまつた。

その人のことを悼む気持ちなどというものが自分の中にほんとうにあるかどうか、実はよくわからないのだが、ある種、人は死んでからが本番というか、死んでくれたほうがその人との距離が縮まるような気がすることは確かである。事実、いま自分とその人との距離は、生前よりはるかに近いような気がする。

る。

先月、平田篤胤門下に入るようなことを書いたが、平田篤胤もこうした生者と死者との緊密な、親しい関係を折に触れ感じて、その実感の中で生きていた人のように思えてならない。生者と死者とは、決してこの世とあの世というような隔てられた世界で各々別々に生きるのではない、と彼は考へている。両者の舞台はともにこの同じ世界であつて、ただ生者には死者のことが見えないが、死者からはこちらがよく見えるのだという。死者は諸々の神々とともに不断にわれわれ生者に働きかけており、われわれを見守り、あるいは導き、あるいはともに楽しむとうする。

自分のまわりに相霊をはじめいろんなものがうようよしていることは、わたしにも実感として感じられる。わたしは自分の生まれた土地と分かちがたく結びついて生きており、その土地にまつわるさまざまな霊や、その土地でこれまで生きて死に、最終的にわたしを産むことになつた先祖たちの霊とともに生きている。そのすべてがこちらに親しく語りかけ、こちらがなにかはじめると、やつてきて様子を見ている。わたしにはこれといった才もないのだが、絵を描こうとすれば絵の達人だつた者が出てきてあれこれ口を出し、篤胤翁の書物を読もうとすれば、わたしには翁のような頭はないけれども、翁のほうでは、なにしろ直筆の掛け軸という質を取られている

から、仕方がないこれまたの因縁であると思つて、理解を助けてくれていたという気がする。

理知的な自我はひとりでもどこまでも行こうとするが、人のそうでない部分は、関係性というものをあくまで求めている。いかなるものにおいても対象を必要とするということは、この世に生きるわれわれの非常に根ぶかい、根源的な条件である。もしわれわれが天使であれば、天使というのは互いの思っていることがみんなわかってしまうような存在らしいから、コミュニケーションの必要がなく、摩擦もなにも生じず、その心は平穩であろうと思う。ところがわれわれには肉体という殻があつて、互いの思いもわからなければ、欲求も思考回路も理解できない。死んでその桎梏から解放されたとき、われわれははじめて全的に、他者に向かって開かれた存在として存在しうるかもしれない。この世界での一番強固な法則は、われわれが対象を必要とすること、したがってなにをするにも、なんらかの意味でのコミュニケーションを常に必要とすることである。

どり着いたところで、あたりは人でいっぱい、見たいものもろくに見られず、時間に追われ人に押し流されてそそくさと出てくるようなことになりかねない。

ところが、これでわたしが死んで、体をなくしたとする。すると、わたしはどこへも通行料無料で行き放題なのである。ルーブルだのウフイツィだの見たい美術館へいつでも入れるだろうし、ギリシアのとんでもない僻地にある教会や修道院へも苦もなく行けるようになるだろう。しかもそのときわたしは体が無いのだから、誰にも邪魔されず、押し出されたり足を踏まれたりしないで、そのあたりにふわふわただよって心ゆくまであたりを眺めていることができる。運がよければ美術品や建築物の作者に会えるかもしれないと思う。そしてその人がなにを考えてそんなものをこしらえたのか、ひよつとすると聞き出せるかもしれないと思う。

わたしは現世にいらだち、それをいまいましく思っているというより、死後をただ楽しみに待っている。わたしにはそういう死後の自分というものがごく当たり前に存在するという、確信以前のもっと原始的な強い感覚がある。もちろん、この世にいま生きるわたしを担っている自我は、死にたくないし死ぬのが死ぬほど怖いのである。けれども、そうでない部分のわたしは、あらゆるものともっとゆるやかな、霊的なとしか言いような交感の世界を知っている。

その世界ではわたしがわたしひとりであることあり得ず、死者が生者と決定的に分かたれることもあり得ない。人は死ねば通常生者の側からは見えなくなるから、この世のわたしという意識は寂しがるに違いないし、なにかむなく悲しく思うに違いない。ところが、その意識の向こうに広がっているもっと広い意味での世界では、様相はまったく別になる。

願わくば、どちらの世界にもちゃんと自分の足を片足ずつ置いておきたいものである。両足をいっぺんにどっちかへ突っこんではならない。生きているあいだに、あんまり死者の世界にばかりのめり込むのも困りものである。そこまで行くと、わたしはこの世に物体として存在するという貴重な経験をし損ねたまま、中途半端にあの世へ行くことになろう。かといって、あまり生者の世界で生きぬくことにかまけすぎると、死ぬときになって身の振り方がわからなくて困るだろう。

死後の世界をどのように観念し、どのような心構えをしておくかは、しかしその人に任せられている。篤胤翁はさまざまな宗教や哲学の世界を涉猟して、ただこの日本国にだけ、靈魂や世界の成り立ちや死後の世界に関する真の知識が伝わっていると考えたようだが、これは彼が日ごろ感じていたに違いない、靈魂や死後の世界に関する確信の強さをあらわしているのだろう。わたしにもそれと同じだけ強い確信

があるが、遺憾ながらその確信の強さも思い描く世界も、人によりひどく異なっていることを否定できない。そしてそれでなんの問題もないように思う。こんなものをなにかひとつのもので統一しようとしたら、それこそ最後は戦争になるだけである。

ともかくも、ひとり雑誌というアイデアをわたしに授けてくれたKさんが鬼籍に入り、わたしもまたいろいろ考えねばならなくなった。具体的には、この雑誌をどうするかということである。わたしはいままでは、自分が自分の力で生きているのでもなければ、そんなことをする必要さえないことを知っている。金銭問題とは実にこの世の問題であるが、わたしはその問題からなぜか除外されている自分を感じて。欲望にまかせればきりがなし、人が金を稼げるかどうか、金持ちになるかどうかといった問題もまた、行き着くところまで行けば、教育や社会の問題というより、ある種運命の問題である。

内村鑑三も、金儲けはほかの職業と同じように、ある人たちの天職であると述べている。金儲けのことについて少しも考えを与えてはならぬところの人が金を儲けようとする、非常に穢く見えるとも述べている。わたしはこれに強く同意する。だからといって投げやりになってもいけないし、最初からこの世の栄達など諦めろという話でもないのだが、少なくともわたし個人に関して言えば、金の問題など

自分の人生から追い払ったほうが幸福であるし、自分がそうした次元にほんとうの意味で生きられないことも知っている。

そこで、この雑誌の話に戻る。いまこの雑誌を読むために、月々いくらかお支払いいただいている方がいる。その方に向けてわたしはこの雑誌を送っているわけだが、そういうある意味制限つきやり方が、いったいわたしにとっていいかどうか。金を徴収するということは、結局なんらか自分の利益のために、一種の制限をかけることである。わたし自身があまり制限のない世界に生きているのに、自分で自分のものに制限をかけるというのは、いったいどういうことであろう。こういうやり方はいずれ矛盾することになると薄々思っていたが、やはり矛盾することになったのである。

結論はまだ出ていない。急に雑誌の発行をやめるかもしれないし、まだしばらく続けるかもしれない。課金システムについては、わたしもまた金儲けについて考えはじめたとたん穢く見えてくる人種のひとりに違いないから、多分廃止することになると思う。どうも、自分の書いたものを読ませるために金をとるというのは、やはりなにか違う気がする。金というのはそういう性質のものではないはずだ。金なる人も崇めまつる尊いお方のことを、ほんとうには理解できたためしがないが、それだけはわかるような気がする。あるいはとうの昔から知っていたの

かもしれないのである。それはただ風のように、諸霊のうるわしい息吹のように、そのへんを自由気ままに吹き渡っているのである、と。

掴むべき人がそれを掴み、ある人はそれに踊らされ、また別の人は、その存在に気づいて親しげに微笑みかけるけれども、ただそれだけなのである。

二〇二四年六月三十日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>



Konstantin Gorbatov : "Boats in a harbour"